

フィンランド、声がつなぐ言語教育

—成長を支える共同性のかたち (二)—

金井 景子

キーワード：フィンランド、国語教育、声、職業学校、共同性

【要 旨】 本稿は、2010年3月に刊行され『早稲田大学教育評論』に掲載された「フィンランド、声がつなぐ言語教育——成長を支える共同性のかたち (一) ——」の続編である。2010年8月23日から27日までの第2回の踏査のうち、日本の中学校課程に相当するクラッシリネン学校とタンペレ職業学校への訪問に関する報告である。義務教育の後期課程において「声」を用いた授業実践はどのように発展・展開しているかを実地体験し、また報告例が少ない職業学校における「声」を用いた授業実践の実相をつかむことが今回の目的である。

クラッシリネン学校では、8年生と9年生の授業を参観し、生徒たちが生活体験知と教養を総動員して自己主張するレトリックを構成し発表する実践を、フィンランド・メソッドの中核にあるカルタの運用とともに追体験した。また、タンペレ職業学校では、同じ教員によるまったくタイプの異なる2種類の授業実践に参加し、職業人としての批評性の獲得に資する国語の授業の在り方を学んだ。

いずれも「声」に出すことで、クラスのメンバーに自身の価値観を提示し、それに対する反応を受けて、最終的には「書く」行為へとつなげて行く点に共通点があった。

(1) 本報告の位置づけについて

本稿は、2010年3月に刊行され『早稲田大学教育評論』に掲載された「フィンランド、声がつなぐ言語教育——成長を支える共同性のかたち (一) ——」の続編である。この論文は、2009年度から金井が個人的に研究をスタートさせた「中等教育国語科における朗読を挿入したプログラムの開発」(文部科学省科学研究助成金「基盤研究C」)の一環として、2009年8月24日から8月29日にかけてパツピラ保育園、カロネン基礎学校を訪問し、授業参観および管理職や担当教員へのインタビューをフィンランドの児童・生徒たちがどのような環境の中で読解力を養っているのかについて、「声」に着目して考察する目的で行ったものの報告であった。保育園から大学まで、学びの「場」において、「語ること」と同様あるいはそれ以上に「聴くこと」が重視されているフィンランドにあって、「聴く」スキルの習得が「語る」スキルと一体化していることに、着実に柔軟な学力育成の起点を見た。それに続くものとして本稿は、2010年8月23日から27日までの第2回の踏査のうち、日本の中学校課程に相当するクラッシリネン学校とタンペレ職業学校への訪問に関する報告である。義務教育の後期課程において「声」を用いた授業実践はどのように発展・展開しているかを実地体験し、また報告例が少ない職業学校における「声」を用いた授業実践の実相をつかむことが今回の目的である。

(2) 生活体験知と教養を引き出す「声」の広場——クラッシリネン学校

2010年8月24日に訪れたクラッシリネン学校 (Klassillinen Koulu) は創立120年の歴史を誇る中学校である。外国語選択科目の中にラテン語が設置されていることでも知られ、素晴らしいレリーフや重厚な円柱がある古典的な建造物を目指して、在校生の約半数が校区外からやってくるという、タンペレ市屈指の人気校でもある。

午前8時が始業の刻限だが、先生たちは生徒とまったく同じ時間帯、ギリギリに登校して来る。ホームルームなどの始業のための業務はないためである。生徒たちは、時間割に従って、教科を教える先生の部屋へと移動して授業を受けるシステムなので、休み時間はいつも廊下には大移動する生徒たちで溢れ返っている。

私は同校で、ピア・ヘイニカイネン (Ms.Pia Heinikainen) 先生の1-2時間目の8年生 (日本に置き換えると中学2年生) を対象とした「国語」の授業と、5-6時間目の9年生 (中学3年生) の「国語」の授業を参観した。以下、それらを紹介しつつ、コメントを加えて行く。

8年生を対象とした1-2時間目の「国語」は、1時間目が「子どものとき最も好きだった本の話についてスピーチし、意見を交換する」というテーマ、2時間目が「いかなる説得の論理を駆使すれば他人の意見に影響を与え得るか」というテーマによる発表と質疑から構成された授業であった。クラスの生徒数は25人と、昨年訪問した小学校に比べて多いが、発表と質疑のテンポが良いので、緊張感が途切れず、みな集中している。

1時間目の「子どものとき最も好きだった本の話についてスピーチし、意見を交換する」授業は、女子1名と男子3名が前に出て発表し、それぞれの発表に対してクラス全体で質疑をするというスタイルをとっていた。

1人目の女子は「NOKSU」という題名の幼児向けの絵本を持参して、ブックトーク形式で発表した。お天気の移り変わりに対応して、その日着ていくのに相応しい服が描かれた絵本のページを繰りながら、この本がきっかけとなって毎朝空を確認する習慣がついたこと、そしてファッションに興味を持ち、将来デザイナーになる夢を持つに至ったことを、実に楽しそうに語った。

2人目の男子は、自宅で作成したという原稿を読み上げるスタイルで、4歳のときに読み聞かせをしてもらったウサギとカバが相撲をとる話について語った。本の内容を聞いた女子の1人が、「そんな複雑な話、4歳の子どもの解るわけがない」と批判的な意見を述べたのに対して、「4歳の子どもの解る」とはどういうことかについてのディスカッションがわき起こった。

3人目と4人目はいずれも男子だったが、期せずして兩人とも「クマのプーさん」を取り上げていた。3人目の男子の論点は、原本とディズニー版アニメとの違いを指摘したものだったが、質疑では「その本は誰から与えられたものか」という問いに対して、ディズニー映画が入口だったが、興味を持って図書館で原本を探したとの回答があった。4人目の男子は、「クマのプーさん」シリーズのうち、プーさんがキツネと釣りに行った話を取り上げ、この話にはベースとなる民話が存在することを指摘し、民話ではキツネの頭の良さ (狡猾さ) を示すさまざまなバリエーションが存在する例示も行った。中でも、クマの尻尾が短いのは、キツネがクマを唆して、湖の氷の穴に尻尾を釣り糸代わりに浸けさせて魚釣りに失敗したためであるという来歴譚があることを紹介すると、一同大いに盛り上がり、「自分が小さいときに聞いた話はこうだ」「私が読んだ

本のパターンはこうだった」とさまざまな意見が交わされた。

生徒たちの発表と質疑の後に、ピア先生が「12人の兄弟」という民話の朗読と解説を行った。淡々とした口調で語られた朗読が終わると、早速、生徒の1人がラストの異なる民話の存在を指摘したのを受けて、ピア先生がそのバージョンのイラストを回覧する。義母の陰謀が発覚して、煮えたぎった油の釜ゆでの刑に処せられるというものであったが、生徒たちの反応は、「ひどい」とか「残酷だ」といった印象批評に止まらず、「読み聞かせだと、子どもはこういうものもけっこう受け入れてしまうね」「本当に人間が歴史上で行ったことの方が残酷だ」という踏み込んだものが寄せられる。その後の論議は、むしろ幼児に対してこうした残酷な場面を含む作品の読み聞かせをするとしたら、どう工夫するかという方向に展開していった。

1時間目の授業を通して感じたのは、発表した生徒も、聴いて質疑に加わった生徒も、幼少時の家庭や保育園、基礎学校での読み聴かせや読書体験といった、学習というより生活体験知のレベルのものを総動員し、話し合いの「場」を相互に補い合っているということである。かつて拙稿でも触れたことであるが、2歳児保育においても3-5歳児保育においても、就学前教育の一年間のいずれも、実に多用で時宜に合った「話す／聴く」ことの学習が行われている。使用されるテキストの種類も豊富で、文字が読めない時から耳と眼に訴える読書が遍在している。その流れは基礎学校にも受け継がれており、家庭と保育園、基礎学校の、どの場も図書館と連携しているので、子どもが大人の声を通して身近に感じて興味を示した本に、確実に辿り着き、今度は自分の力で黙読し、それを繰り返し読み、基礎学校からスタートする物語分析の手法を援用して、その物語のどこに自分は惹かれているのかをそれぞれの表現方法で伝えることが可能になるのである。

2時間目の「いかなる説得の論理を駆使すれば他人の意見に影響を与え得るか」というテーマによる発表と質疑は、「VOIMA」の教科書を用いて行われた。教科書の例題は、「エノラが母親にロックコンサートに出かける許可をもらうために、どんな内容の手紙を書いたら効果的か」というもの。教科書ではエノラの手紙の全文が掲載され、そこにある構成要素が、「感情に訴える」説得法と「理性に働きかける」説得法とに大別され、そのバランスが相手を説得するのだと解説されている。授業ではこれを踏まえて、ピア先生から予め提示されていた、

- ① 校長に、授業中に帽子を着用して良いという許可を得る。
- ② 大統領に、夏休みを3ヶ月に延長することを進言する。
- ③ サンタクローズに、1万ユーロプレゼントしてくれるように頼む。
- ④ 著名なロックアーティストに無料で演奏をしてもらう。

といった課題に従って、指名された説得する側の生徒と受けて立つ側の生徒がペアになって次々に黒板の前へ出て、やりとりをする。ピア先生は、教室の奥にある小さな控え室から、カツラや付け髭などの小道具を持ってくるので、教室は一気に祝祭的な雰囲気包まれた。ロールプレイングの要素も加わったことで、ことに説得される側（申し出に反論する側）への想像力が刺激されるのか、説得する側の論理をことごとく跳ね返して行く。このことは生徒たちがすでに、「大人の論理」を内面化していることの証明でもある。日本とは異なるフィンランドらしさを感じたのは、校長も大統領（2010年8月の時点では）もロール・モデルが女性だったことである。

訪問校では校長も副校長も実際に女性であり、基礎学校においても管理職が女性であるケースは比率として高い。ピア先生は生徒たちに女性のカツラを貸し与えて説得される側（申し出に反論する側）を演じさせていたが、26名の生徒たちが男女の別なく（むしろ、教育の現場では女性の進出の方が男性のそれを上回っているほどである）トップリーダーを含めた将来像を自由に描き得る社会状況があるのは、ジェンダー・スタディーズを専門領域の一つとする私にとっては日本との格差を自覚させられる局面でもあった。

②の設定では、説得する側から「夏休みが3ヶ月に伸びると教員の授業準備がさらに充実する」という観点が出され、ここでも生徒たちが「教わる側」の自分たちだけではなく、「教える側」の先生たちを説得の材料に用いている点が注目された。「大統領」もこの論理には説得されたようで、代替案として、その他の短期の休日をいくつか返上することを条件に、交渉は成立し、3ヶ月の夏休みは承認されて、教室では拍手喝采が起こった。

ただ、全体を通した印象としては、「感情に訴える」説得法は数も少なく、また説得される側や見守る生徒たちが知的な興奮を感じるのは「理性に働きかける」説得法のように、④の有名アーティストによる無料コンサートの実現に関しても、「恵まれない子どもたちがあなたの音楽で勇気づけられるのを見ることで、あなたも力づけられるのではないか」という感情に訴えるレトリックよりも、「チャリティコンサートを開催することで新たなメディア戦略をかけてはどうか」という提言に、「ロックスター」や他の生徒たちは関心を示していたようである。学齢期を考慮すれば「感情に訴える」ことへの照れもあるようだったが、後にピア先生に伺うと、今日出た話のポイントを、宿題で、文章にまとめる際には、感情と理性双方のバランスが取れた文章構成にすることを促すので、生徒たちはそこでまた、作文内に感情／理性の双方が構成要素として包含されているか自問自答をするということであった。

予め与えられた課題に向き合う予習と、授業内容を自身の中に定着させる復習の間に、本番の授業が置かれているわけだが、そこが「正解を知る答え合わせの時間」に終わらず、生徒たちの声が飛び交う祝祭的で体験型の時空になっている。また、設問が学習者たちの知識のデータベースを検索することで事足りるものではなく、生活体験やそれに裏打ちされ培われた教養を問うものになっているので、「国語」の授業でありながら、「総合学習」の要素が問われることにもなっている。

5-6時間目の9年生（中学3年生）の授業は、TAJU社の教科書を用いた「自身の文化ツリーを作る」というテーマのものであった。生徒の数は16名である。近年、フィンランド方式として注目を浴びている方法論のうち、その中核に位置するカルタと呼ばれるものを駆使したワークであった。カルタとは取り組む課題に関して自由発想して浮かんだキーワードを記し、それに関連して発想したものを、その語の回りに次々に書き出して行くことで、自身の頭にあるものを柔軟に可視化していくという手法で、基礎学校から大学にいたるまで、フィンランドでは日常的に多用されている方法論である。

まず、ピア先生から教科書に挙げられている例を踏まえながら、一人一人が自身の文化ツリーを作成する指示が与えられる。その際、自身の使用言語、受容している宗教、食文化を書き落とさないことの念押しがあった。「文化のツリー」ということばだけを投げかけられると、音楽、

美術、文学といったいわゆる自身が趣味志向に則して選んだ文化を挙げることに止まる可能性があることから、こうした、生育環境とセットになっていて受容を余儀なくされたものを出発点に据える指示が出たものと思われる。

このクラスにはロシアから移民した生徒が3名、移民2世も複数名存在する。クラスの三分の一程度の生徒がフィンランド以外の国の影響を色濃く受けて育ったメンバーからなるというのは、現在の日本に照らせばごく一部地域を除いてはあり得ない状況であるが、公用語がフィンランド語とスウェーデン語の二つあり、サーミ語などの少数民族のことばにも公的配慮がなされているフィンランドにあって、近年は労働力の導入の必要性からアフリカや中東からも移民が盛んになりつつある現在、異なる文化背景を持った者同士の共存は日々の現実そのものである。そうした意味でも、まず、生徒一人一人が自分の構成要素である文化を自覚し、またクラスメートのそれを知り、相互理解をするというこの授業は中学最後の学年の、スタート段階で取り組むのに相応しいものでもある。

5時間目の前半は教科書や先生の解説を踏まえて、後半には一人一人に、自身の文化に関するカルタの作成を行わせていた。期間巡回をしながら、ピア先生が出されているキーワードに対して具体性を促したり、質問を投げかけたりしているのだが、おおむね生徒は集中していて、先生の促しがなくても、ノートはどの生徒もカルタで埋め尽くされていた。

この方法への注目度は高く、『フィンランド・メソッド5つの基本が学べる国語教科書』シリーズにおいていち早く具体例が紹介されたのはよく知られている。私は、一昨年には小学生、そして今回は中学生が学ぶ現場で、カルタを実際に用いているのを目にしたが、いずれも思い浮かんだことを文章にして箇条書きするよりも、発想した単語をハニカム状に増やしていく方法に機動力があり、フィンランドの生徒たちがこの方法に習熟していることで大きな学習効果を上げているのは明白である。

ただ、カルタが学習者個人にとって、自由かつダイナミックに発想する手助けになるとしても、最終的にはそこから第三者に語りかけるに足るストーリーが構想され、表現されることが到達点であることを見逃すことは出来ない。これに関しては、日本でも近年、情報処理学会の全国大会で、「共有知を利用した個人的発想支援システムの提案」(福中勝博、大久保雅史、第73回全国大会講演論文集、2011年3月)と題する発表でカルタの批判的導入が提言されている。また、門松直子・菅邦男の「『読むための型』を学ばせる授業の研究——フィンランド国語教育に学ぶ物語教材の授業」(『宮崎大学教育文化学部紀要』第24号、2011年3月)において、フィンランドは初等教育から国語教科書において、単元ごとにおいて読む・聞く・話すに並んで書くことの設問がほぼすべての単元に設けられ、発想力・論理力・表現力・批判的思考力・コミュニケーション力の五要素を段階的に定着させる仕組みになっているとの指摘もある。各単元の学習時間がかなり制限され、かつ人数が35人から場合によっては40人を超えるようなクラスを複数担当することが常態化している日本の学習環境において、単元の締めくりに必ず、まとまりのある文章を書かせて、教師がそれに添削やコメントを加え評価するというのは現実問題として極めて困難である。発想の段階でカルタによるブレイン・ストーミングができたとしても、それが一つの説得的なストーリーとして着床するところまでの一連のフローをいかに実現するかということも、

フィンランド・メソッド導入の際には課題になるところである。

5時間目のカルタ作成の1人のワークをうけて、6時間目では3人1組になって、それぞれの「文化のツリー」について語る／聞くというグループワークを経過した後、グループそれぞれから1名ずつが前へ出て、全体に向けての口頭発表が行われた。全体への発表をした生徒の1人に、フィンランドの文化以外は受け入れられないという男子がおり、質疑などの様子からも移民してきた生徒やさまざまな文化に積極的な興味を示している生徒たちとの間で緊張があることが察せられた。その男子生徒の価値観を形成したのは彼自身であると同時に周囲の大人たちでもあることを考え合わせると、彼がその場のクラスメートの反応をいかに受け止め、自身のみならず彼の周囲の大人たちへの問いかけとしてフィードバックし得るのか、興味の尽きないところであった。

参観したいずれの授業にも共通することは、個々の生徒の生活体験知と学習によって培った教養とを織り合わせる最初の表現が、「声に出してクラスメートに発表すること」であり、その時のさまざまな反応に受け答えすることを経て、「書く」行為の中で定着される——いわば、他者の眼差しや声を踏まえた認識の更新という、かなり高度で手間のかかる学習が求められていたことである。当然のことながら、そのことに向かう動機の形成が不十分であれば、カルタの作成やそれを踏まえたストーリー作りはおざなりなものになるし、また段階的に設定されている学習方法の蓄積が不十分な場合も、第三者に対して説得的なプレゼンテーションを行うことができない。学年が進むにつれて、生徒間にそうした自己表現能力の格差が広がっているようである。

日本の場合だと、喋るのは苦手だが書く能力はあるとか、喋らせるとかなり面白いのに書かせるるとまとまりがないといったアンバランスを抱える生徒は珍しくないが、これまでの学校訪問の経験からすると、フィンランドの場合、基礎学校の低学年から営々と読む・聞く・話す・書くといった積み上げが成されるためにそうしたアンバランスが起りにくい反面、国語に苦手意識を持つ生徒が進路選択の期限内や10年生時——日本流に言うところの「浪人時代」に、成績の向上を迅速に図ることはほぼ困難なことに思われる。本質的には、すべての学習の基盤となる言語運用能力が付け焼き刃で向上するものでないことは言うまでもないことであるが、学習環境が整わず予習・復習が習慣化されなかったり、学習への動機が形成できないなどの影響によって、国語嫌いになった場合の、セーフティネットのありようについても、今後また新たに実態を把握してみたいと考えた。

(3) 職業人に必要な批評性を育てるために——タンペレ職業学校

2010年8月25日に訪問したタンペレ職業学校では、ミンナ・マルチカイネン (Ms.Minna Martikainen) 先生が担当されるオーディオ・メディア科の3-4時間目の授業と、既卒者でコックの資格を取得しようとする生徒向けの短縮講座の5-6時間目の授業を参観した。

フィンランドの子どもたちは、9年間の義務教育を終えた後、普通科後期中等学校(3年間)へ進学するか、職業学校(3年間)へ進学するかを選択をする。山内乾史・原清治の『学歴と就労の比較社会学』(学文社、2010年)によれば、2006年の統計で義務教育修了者約6万5,800人のうち、ほぼ9割が後期中等教育へと進学した。普通科高等学校に進学した者が51%(女性の

60%、男性の43%)で、職業訓練校に進学した者は40%(女性の31%、男性の49%)である。3年間の課程を修了すれば、専門大学AMKへの進学することができる。

職業訓練・教育は学校で行われるものと徒弟制度で行われるものがあるが、今回は学校で行われる理論教育——その国語の授業の一端を見学したわけである。

職業学校には基本的に、4つの国語講座が用意されている。

- ① これまでの義務教育における学習内容の復習
- ② メディアの学習
- ③ 職業に着いた際、必要となる口頭でのコミュニケーション能力の育成
- ④ 卒業論文

このうち、④の卒業論文は、自身が選んだ職業と自身の積んだスキルの紹介を中心とした約15ページにわたるレポートで、その評価の点数は卒業証書に記載されることになる。全行程は32時間から成る。

オーディオ・メディア科の3-4時間目の授業は②の講座であり、テーマは「広告についてのメディア・リテラシー」であった。卒業後にテレビや映画、コマーシャルなどの制作現場で働く希望を持っている生徒たちにとっては、最も興味深く、また自身の力量を発揮したい授業であったようだ。3時間目は、Otawa社の教科書「Tekemalla taitavaksi」と、Edita社の「AIDINKIELI」を中心にミンナ先生が作成したオリジナル教材を加えて、コマーシャルの分析例が示された。

歯のホワイトニングのためのペイスト販売のポスターをスクリーンに映しながら、

- ① 何を売ろうとしているか
- ② このポスター制作はどこからスタートしているか
- ③ 広告に要する費用はどれくらいかかるか
- ④ 広告の対費用効果と、広告費が製品の代金に加算されることへの意識
- ⑤ コンテンツの分析

これらの観点に対して、10名の生徒たちが次々に意見を出し合う。誇大広告の指摘をかわすために、ポスターの隅っこに極端に小さなフォントで健康への警告や効果に個人差があることなどの記載がある点等、ポスターをめぐってさまざまな発見が指摘され、生徒たちがコマーシャルに強い関心を寄せていることがわかる。

コンテンツの分析に関しては、ミンナ先生が「ステレオ・タイプ」の使用について講義を行った。とはいえ、ここでも先生が一方向的に語るのではなく、生徒に質問を投げかけて、答えを引き出しつつ、話を進めていく。

「ステレオ・タイプの良いところは？」

「カテゴライズすることで、そのものの特質を把握できる」

「ステレオ・タイプの悪いところは？」

「個別化せずにこうだと決めつけるので、多様性を見失う」

概念的な解答が出てくるのは、それ以前に一度、ステレオ・タイプについての学習をしていたことにもよるようであったが、訪問以前には、荒れた工業高校の成立しがたい授業をイメージしていた私の期待は、良い方に裏切られた。ただ、後でミンナ先生に伺うと、フィンランドでは授

業に関心が持てない生徒はドロップアウトして学校に来なくなるので、日本のように授業で騒いで妨害するというのがかえって想像出来ないということであった。

4時間目は、生徒たちがおのおの持ち寄ったコマーシャル教材を発表し、そのコマーシャルの魅力や問題点を口頭で解説する。電話の番号案内サービスやマクドナルドのコマーシャルを持参した生徒たちからは、本来地域性とは無縁のはずの商品の販売戦略に、フィンランド人の「無口さ」や「日頃の穏やかさからは想像が出来ないようなスポーツへの熱狂」といったローカルなステレオ・タイプが笑いを引き起こすイメージとして援用され、商品を受け入れやすいものになっているといった分析があり、前の時間の授業が踏まえられているところも興味深かった。生徒たちの学習への取り組みは、2007年9月にタンペリーン・リュセオ（タンペレ普通科後期中等学校）を訪問し、授業を参観させてもらった折と何ら遜色を感じさせない、積極的かつ充実したものであった。このクラスから専門大学AMKへの進学者が多数出る可能性はあると感じられた。

5-6時間目の授業は、既卒者で、求職のために学校に復学してコックの資格を取ろうとする生徒たちへの短縮講座であった。在学している場合は「国語」の授業として通常32時間のコースを、短縮講座では2時間×8回の計16時間で実施する。一刻も早く働いて生活をする必要がある生徒たちだということであったが、欠席者が半数近くあり、出席しているのは6名のみで、男子3名、女子3名。女子のうち1名は最初から最後まで机に突っ伏して寝ており、2名はかなりの年配者で、ピア先生のお話では失業状態から社会復帰を目指しているとのことであった。男子3名も年齢は20代後半、社会の荒波に揉まれた雰囲気、クラス全体として学習意欲に溢れているとは言いがたい。ミンナ先生よりも一足先に、私と通訳のペトリ・ニメエラさんが教室に入った際、眠っている以外の5人から睨みつけられたときは緊張するとともに、授業に部外者として闖入する申し訳なさがこみ上げた。

この時間は、「職業に着いた際、必要となる口頭でのコミュニケーション能力の育成」の講座で、テーマは「いままでに自分がレストランで受けた良い接客／悪い接客の記憶を語り合う」というものであった。

良い接客例としては、なかなか生徒たちから例が挙がってこない。かろうじて、イタリア旅行をしたときに、自分がフィンランド人だと知ったウェイターがフィンランドの話を振ってきてくれたという逸話くらいであったが、悪い接客になった途端、メニューに十分な情報が載っていない、スタッフが足りずにオーダーを取りに来ない、店員が逆切れをした、年齢差別にあった、万引きを疑われた等、皆が口々に語り合った。そうした中で、男子生徒の1人が、「でも、基本的なサービスさえあれば、それで十分なんだけどね」と言ったところで、ミンナ先生から、「基本的なサービスってどういうものでしょう？」と質問が飛んだ。それまでの全くやる気がない状態から、それぞれが、料理についての十分な情報や配膳されるまでの時間、トラブルが起こった時の迅速な対処、といった点を指摘する。

ミンナ先生は、生徒たちの関心を逃さず、あまりに料理が遅かったときの、フロアでの対応について、生徒を2人1組にしてシュミレーションを行った。ロールプレイングは基礎学校の低学年であっても職業学校の既卒者であっても、芝居心をくすぐられるものなのか、授業開始当初は仏頂面だった年配の女生徒や強面の男子生徒からも笑みがこぼれる。ウェイター役の生徒が遅く

なった言い訳をするのに対して、客の役の生徒が「そんなことぐだぐだ言っている間があったら、料理を早く出してくれ」と怒り出したのに対して、ミンナ先生が、「文句を言うお客さんは、遅れた理由を知りたいのではなく、一刻も早い解決を求めている」とコメントすると、一同、大いに納得したようで、そこでノートを取る生徒も多かった。

ミンナ先生は参観者の私に対しても「日本の飲食店の接客とフィンランドのそれはどう違いますか?」と質問を投げかけてくれたので、「日本は居酒屋などうるさいほど賑やかなところもけっこうあるけれど、フィンランドはほとんどが静かで落ち着きますね」と答えたところ、「賑やかなほうが勢いがあるって良いんじゃない?」「いや、やっぱりうるさいのは嫌だよ」「静かだと盛り上がれないよ」「ちょっと大きな声を出して友達と話したら、店からすぐに出てくれって言われて嫌な思いをしたことがあるよ」と生徒たちがコメントをしてくれた。その後、日本はフロアのウエイターやウエイトレスの大半がアルバイトになりつつあることなどを通訳を介して話すと、興味を持って聴いてくれ、授業が終わった後に英語で、「東京に行ってみたいよ」と声をかけてくる生徒もいた。最初の拒絶的な表情からこちらを気にかけてくれる人懐っこい表情への変化はいささか劇的で、嬉しいものであった。この授業の着地点は、自身が考える「良い接客／悪い接客」についてのレポートを書くことである。予習の段階ではほとんど活性化しなかったイメージが、授業を受けることによって膨らみ、「書く」ことを通じて再把握されると同時に、職業人として現場に立つところを明確にイメージさせるところに最終の到達点がおかれているのだそうである。

ミンナ先生は、3-4時間目のオーディオ・メディア科の学生たちとコックを目指す既卒者の短縮講座という、職業学校の中でも両極に位置する授業を参観させていただいたわけであるが、その両方に対して、受講者の反応を確かめつつ彼らの学習能力を引き出して行く授業実践は、普通科後期中等学校の国語の授業が「文学」や「文法」といった、日本の感覚から言えば大学の授業のようなものであるのに対して、よき職業人——それも批評性を備えた社会人となるために、「国語」の授業でどのような学習材や教授法が求められるかを考えさせてくれる、現実的で即戦力のある実践である。

しかし、ミンナ先生によれば、同校に日本人の教育関係者が視察に来て授業に参加したのは、彼女が知る限りでは私が初めてだそうである。「PISA 世界一の学力の秘訣を探る」というフィンランド詣でも、もっと包括的で根本的な視野を持たなくてはならないと、自戒を込め改めて感じさせられた次第である。「何か一緒に出来るプロジェクトがあったら、やりましょう!」と声をかけていただき、嬉しい大きな宿題を与えられた思いであった。

(4) おわりに

最後に、クラッシリネン学校での授業の合間に、ピア先生と国語科の同僚であるヘレナ先生にインタビューした内容を紹介しつつ、今後の展望について触れてみたい。

ピア先生は、双方向性を重んじ、フィンランド・メソッドの基本である、声を交わし合う現在の教授法がアカデミズムの中でその可能性について評価され始めたのは、1980年代後半のことであり、それまで一方的な講義形式の座学中心だった教育現場は、その後劇的に変わって行ったと

教えてくれた。

自分は1992年に大学院を卒業した改革後世代なので、教員養成課程のプログラムの中に、現在のフィンランド・メソッドにすんなりと入って行けたという。旧システムで教育を受けた現職教諭の人々も変化への対応を迫られたが、大学が行う研修のプログラムも充実していたので、大きな混乱はなかったのではないかということであった。これに対してすぐさま想起されたのは、2000年前後の日本における「ゆとり教育」への方針転換に伴う総合学習導入の混乱であった。政府の一方的なトップダウン方式に、教科教育のレベルにおいては理論的枠組みの検証も不十分かつ具体的な実践例も乏しいままの見切り発車に現場が右往左往を余儀なくされた事態である。教員養成プログラムを提供するアカデミズムとの連携についてもまったく不十分であったことは記憶に新しい。また、免許更新制度の導入に伴う教員の再研修制度についても、政権の動向とも連動して、宙ぶりの状況が続いている。フィンランドと日本では面積こそ、ほぼ同等ながら、人口に関しては5,246,000人とフィンランドの総人口は福岡県や北海道に相当する規模であることを考えれば、日本における今後の教育改革がより実現に向けて多くのコンセンサスを得なければ前進し得ないことは明らかであるが、その際、国公立および私立の教員養成課程を有する大学において、理論と実践に関する論議の場を持ち、それを教員養成課程の個々の現場で検証する試みは必須のものと思われる。

ヘレナ先生からは、現在の中等教育の国語科教育で最もホットな話題として、今後国語の授業が10時間から11時間に増加し、その1時間が「ドラマ」という授業になり、すべての生徒たちがこれを学ぶ案が提出されているという話題提供があった。日本における「総合学習」導入時の混乱が頭をよぎったので、

「『ドラマ』という授業を教えられる先生がどれくらいいるんですか？ そのために新たに研修するとなると大変ですね」

と尋ねたところ、ヘレナ先生もピア先生も即座に、すでに学校行事として劇の上演などはあらゆる学校で実施されており、その指導方法も大学の教員養成課程で学んでいるので問題ないという。どれくらいのクオリティの劇を求めるかは、学校や担当教諭に任されているので、それぞれの教師の力量で行えることを行えばいい。例えば、クラッシリネン学校の場合は、学校行事内の劇の上演は、他の学習の負担にならない程度に行うので、出演することになった生徒たちは2回の全体会議と必要と感じた個別練習で出来る範囲のものを上演するということがあった。それについて私から、日本の場合、公立私立ともに、文化祭で特定の学年がクラス対抗で劇やミュージカルを上演し、競い合うことを伝統的な行事化している学校は珍しくないし、部活として行う場合は地区大会や全国大会への出場など、成し遂げた後は充実感や達成感が得られ、大きな教育的効果も期待出来る反面、生徒たちにも指導・引率する教師にとっても大きな負担になっていると話題提供すると、

「なぜ、全国大会なんて必要なかしら？」

と2人とも顔を見合わせて当惑した様子なので、

「学校内のイベントに出ることで、そんなにモチベーションが上がりますか？」

と重ねて尋ねたことに関しては、

「自分以外の存在になって世界を生きてみるということが出来るようになって、想像力が以前よりも豊かになればそれで十分なので、誰かを負かして評価を得る必要はないと思う」との回答であった。

ドラマをはじめ、表現系の授業の、評価の難しさについても質問すると、お二人はフィンランドの国語科教員が共有している3つのポイントを挙げてくれた。

① 自己評価 ② クラスメート間の相互評価 ③ 先生からの評価

これらの合算で出された総合評価について、もし疑問や不満があれば、申し立てが出来る。学習者本人や保護者がこうした評価について納得していないという話を聞いたことはないとのことであった。

やりとりを通じて、何よりも私自身の中に、日本の国語科教育において「ドラマ」が導入される際には「こうでなければならない」といった高いハードルが予め設定されていることに気がついた次第である。本務校である早稲田大学の国語科教員養成課程には、冒頭で触れた教員養成GP以来の所産として、教員に必要な「声」を育てる新科目「授業に活かす朗読講座」あるいは「届く声を育てるワークショップ」、またプログラムの一環として詩の群読の授業を実施する「中等教育国語科インターンシップ」といった「ドラマ」に隣接するはずの授業を構想・運営している者として、教員に必要なコミュニケーション・スキルの習得や、またより深い作品解釈の手助けとして演劇的要素の導入に向き合う時期が来ているとも感じた。その前提として、大学教育学部における関連授業の参観および授業担当者や受講者へのインタビューは必須であると考える。前回、今回と訪問した学校の先生方が多く学ばれた、タンペレ大学教育学部に赴く予定である。

今回の学校訪問で、私はクラッシリネン学校の8年生のヨランダ、ヘンナリッカ、マリアという女生徒3名にインタビューを申し込まれ、約40分にわたって話をする事が出来た。彼女らはいずれも大の日本ファンで、私がクラスを訪れることをピア先生から聞いた途端、ぜひともインタビューをさせてくれと名乗り出たそうである。どの生徒も高校生になった時点で日本で学ぶ留学試験に挑戦するという。ヨランダはデザイナーを目指していて、表参道を歩いていたら向こうから自分がデザインした服を来た日本の少女に遭遇するのが夢だと語ってくれた。3人とも日本に夢中になったきっかけは、アニメとJポップ、そして雑誌やインターネットで見た東京ガールズファッションやゴシック・ロリータファッションだという。

「もし、日本に留学する夢が叶ったとして、日本を滞在中により深く理解する方法があったら聞いておきたいです」ということだったので、「若い人の文化にも興味をもっているお年寄りを捜して、友達になり、いろんな話を聴くことですね」と答えたら、3人とも不思議な顔をしていた。後で、翻訳をしてくれたベトリさんが、自分たちの時代とは異なって、現在のフィンランドの若者は日本の伝統文化にほとんど興味を示さず、最先端の文化現象にだけアクセスする日本オタクが急増しているので、実際に日本を体験してたくさん幻滅し発見してほしいと考えていると語ってくれた。彼女らの「文化のツリー」の中心近くに「日本」が位置しているようだったが、彼女らが私の示唆した「若者の文化にも関心を示す日本のお年寄り」に出会って、アニメやJポップ、Jファッション以外のキーワードをカルタにどんどん書き込んでくれることを心から願っている。少なくとも、彼女らと話した7ヶ月後、東日本大震災とそれによって引き起こされ

た福島原子力発電所の放射能事故のニュースは、彼女らや職業学校で「東京に行ってみよう」と最後には親しく声をかけてくれた生徒さんたちにとってどう受け止められたか、あるいは教室で先生方はどんなふうに話題の提供をされたかについて、尋ねてみたいとも思う。

私自身も、2011年3月11日以降、緊急上映されたデンマーク、フィンランド、スウェーデン、イタリアに取材したドキュメンタリ映画「100,000年後の安全」に大きな衝撃と啓示を受け、私のフィンランドをめぐるカルタが広がった。原子力発電所から出される高レベル放射性廃棄物の埋蔵をめぐるこの映画は、監督のマイケル・マドセンが、フィンランドのオルキオトにある世界初の高レベル放射性廃棄物の建設現場に潜入し、関係者のインタビューを交えながら、未来の地球の安全を問いかけるもので、世界で初めて、フィンランドで建設が進む高レベル放射性廃棄物の最終処分場「オンカロ」（フィンランド語で「隠れた場所」の意）が舞台である。オルキオトにあるこの施設は、地下500メートル、18億年前の地層の岩盤にトンネルを掘り進み、「地下都市」のような巨大な世界初の高レベル放射性廃棄物の永久地層処分場が建設されている。2020年に完成予定のその施設には、同国内の原発から排出される100年分の廃棄物を貯蔵し、入り口を封鎖して、放射能が安全なレベルに下がるまで、10万年間の間、保管するというのである。その途方もない時空間のスケールの大きさと、果たして人間はその封印を守り通すことができるのかという物語的想像力を刺激されるできごとに、観る者はおのおのの生活体験知と教養のすべてを傾けて向かい合うことになる。

「何か一緒にプロジェクトをやしましょう」という、タンペレ職業学校のミンナ先生の誘いにすぐには答えられない私であったが、3月11日以後、日本とフィンランドの学生間で「100,000年後の安全」をともに観て考え、自分たちのことばで議論することへの夢が育まれつつある。